如何にして宗教に導いたらよいであらうか

――シュライエルマッヘル、フレーベルの教を想ひだしながら――

京都平安女學院專攻部　齋藤善太郎

一

先日も一人の生徒が來て、こんど研究會で宗教々育のことを發表することになりましたがどうして準備したらいゝんでせうか、との相談を受けました。受けた私といふのは、基督教學校の一教師で、其の生徒といふのは、そこの保育科の生徒で、先生として日曜學校に關係したこともある人でした。たいへん敬虔な人で、極く素直に育つてゐ、やがて保姆になるのにまことにふさはしい人であります。そのとき私は言ひました、一般に宗教々育の何であるか、そして其れは兒童生活と如何に關係せしめられねばならぬか、といふ立場から問題にしようとするのであるか、それとも、さういふことゝは別に、たゞ日曜學校の組織を如何にすべきか、その教授指導の細目及方法を如何にすべきか、といふことを問題にするのですか、いつたいどちらです、と云つたのでした。其の生徒はやゝ怪訝な面持で私を觀てゐました。それは無理からぬことであります。なぜといへば、其れが正當であるか否かは別として、とにかく宗教々育といへば多くの場合、若い保姆達とか日曜學校の先生方は、いふまでもなく後の方の立場からのみ問題にさるべきだと、ほとんど極めてかゝつてゐるからであります。しかし、これは餘りに今更めく、今こゝに言ふには餘りに自明に、言はれすぎてゐるほどのことでありま

すが、しかし私として、今勉强もしくは研究の途中にある人として、前の立場からも問題にしてもらひたく、否、ぜひ然うしてもらはねばならんと思つたから、敢て、餘りにも今更めきながら、まへのごとく問を發したのでした。私としては、ここに對兒童の宗教々育の實際家の方々に、もつと〳〵問題を根本的に攻究もし檢討もし、乃至、困惑に陷り疑惑に惱んでほしいのです。でないと、殊に淺薄を怖るゝ宗教々育が、うはすべりしてならないからです。光はたゞ、ゲーテも言つたやうに、惱みのために夜々を眠られもせで過したことのある人や、涙のうちにパンを食べたことのある人からのみ、あらはれてくるからであります。私達からすれば、まさにさういふ方々であられたからこそ、十字架を負はれた主イエス、業の催しにさいなまれてゐた親鸞上人などから、ほんとうの光をいたゞくことが出來るからであります。

いつかも、かの生徒と同じ保育科の人達、宗教々育方法論、それの指導技術などの點では多くの知識と訓練とをもつ生徒等に、その顏を冒して、「一體宗教々育は必要であるか」、「必要であるとして、しかし可能であるか」、「可能であるとして一體何を傳へることであるか」、「傳へることなどではないとするならば、何をすることであるか」、「なぜ宗教々育などご問題にせねばならぬか」、などいふことを矢つぎばやに問ひかけて、問題にしてもらつたことがありましたが、今でもやはり保育科の一教師として同じ要求を感じさせられてゐます。をるところが基督教學校であり、教室で生徒となつてゐる數人は、實習では現に毎日幼稚園の先生として保育に實際從事してをり、日曜日になれば日曜學校の先生として基督教教育にたづさはつてゐる若い人達を周圍にもつてゐるだけ、既に解決せられたはずの事でありながら、しかも、全然未だ問題ともされずに、徒らに其の側を通りすぎて、はなはだしい反宗教的、反教育的な危險と冒瀆とを犯してゐる、いたましい事實に、少からず接するからであります。しかし、これは、あまりにも今更めいた、くりかへしになりますし、かくいふことは其のことが、よそめには、いたましくもあることですから、其れはそれとして、さて、古くして新なる說を、こ

さに其の人の死後百年の記念されてる今年、復た想起したいのであります。其の人さいふのは、かの宗教理解したがつて宗教々育に關しても歴史的に高く聳ゆるシュライエルマッヘルであります。その人に歸れ、「シュライヘルマッヘルに歸れ」は、ちようど教育に關してルッソーに、哲學に關してカントに、さ其れ〳〵古典への歸還が叫ばれるさ同じく、其の道の先達によつて云はれてゐるものであります。私さして、宗教々育に關し、さらにフレーベルの『人の教育』の、あの生々たる叫びに聽き、あの暖かき魂に溫められたいのですが、そのまへにまづ、同じく故きを溫めんがために、シュライエルマッヘルの『宗教について』にかへりゆきながら、かの眞面目なる、誠に敬虔なる、若き魂の教へに學びたいさ思ひます。

二

其の本の第三講は「完教への教化について」の章で、廣い意味での宗教々育に關する所でありますが、そこでシュライエルマッヘルはまづ、もし宗教的な教育を施さうさするならば、しか念願する人その人によつて宗教そのものが顯はに表現せられ且つ互ひに分ちあはるゝよりほかに道はない、さいふ意味のこさを云つてをります。その意味は、此の章のまへにある第二講の宗教本質論からすれば宗教さは、常然、神學的知識さか神話的物語さかを事々しく言葉において云ひたてたりすることではないのであります。さういふやうな知識さか物語さかは、彼によれば、宗教そのものではないのであります。したがつて、其れらは何れの宗教にも附きまさふものではあるが、しかし要するに附きまさふものにすぎないのであるから、其れを宗教そのものであるかに教へこまうさするやうなこさは、彼からすれば、およそ反宗教的冒瀆さいふこさになるのであります。彼の云ふ、顯はに宗教が表現せられ且つ互ひに分ちあはるゝさいふ意味は、むしろ、この場合宗教的な教育を施さうさ念願する人その人が、その生活そのものにおいて、まこさに、ひたに、その宗教そのものに生きて、そこからの自然にして必然なる、いはゞロゴスの顯れさして、神における內なる生活が、言行さしての外なる、生活にま

で顯はになり出でゝ、其れが香ぐはしくも他の人に移り傳はるといふ、そのことによりほかに道は無い、といふことになるのであります。ですから彼はまた、このやうにして若し一人の人が生活そのものにおいて宗教を言ひあらはすならば、すなはち、いはゞ自らがまづまことに宗教的なる音において眞底より鳴りいづるならば、同じく本質において本來宗教的なるものなる他の人も、其の響に共に鳴りいでしめられて、その內に潛み存せる宗教的素質は、麗はしく華咲きいづるであらう、そして然ういふ共鳴關係のこころにこそ、宗教における師と弟子との活ける關連が眞に成立つであらう、といふ意味のことを云つてをります。彼にしたがへば宗教とは、フレーベルのいふところにも似て、人の心の最も奧底なるものが、最も有りのまゝに、最も素直に、全宇宙にむかつて開きいで、其の宇宙のまへに、いはゞ今にして親心の洪大さにめざめたる子の如く、虔しく頭垂れつゝ、畏れ、歡びのうちに父子一體的なる感を感じながら、全宇宙との生の共同を感じつゝあること、であつたのであるから、人が「人」となること、人の「人」たる所以を發揮して「人そのもの」、彼の句はしい言葉では die Menschheit となり、さらに、より高きもの、いと高きものとしての「宇宙」そのもの、Uninersum との、敬虔なる、其れにかきいだかれつゝある、といふ感の關係においてあること、であつたのでありますから、したがつて、人が「人」になりさへすれば、人はすべて宗教的なもの、といふ考を基にして、一人の人が眞に宗教的に鳴りいでゝくるならば、他の人をも然か鳴りいでしむることができる、しかもたゞ其れのみが唯一の道である、といふのであります。

それであるから彼はさらに云ふのであります、宗教が人の內にあらはれるのは他人などの如何ともすべからざることからである、其れは「宇宙」のもよほしによること、言ひかへれば神よりのことであつて、人などの僭越にもとやかくと關與し得ることがらではない、宗教は、人の生活の最內部、「心情」Semüt もしくは Sefühl において、いはゞ親心の暖かきかきいだきに、胸もあらはに己をうちまかせる、神聖なる領域のことゝ祕められたる生の交はりとして、謂ふところの教

授とか傳授とかいふことなどの踏み入るべくもない所である。されば、宗教への教育と稱して、技巧をこらして教へこまんなどいふやうな態度は拙劣であり愚劣であるにすぎない、と云ふのであります。最も宗教を愛し、敬し、其れの眞相を人々のまへにあらはにしようと熱烈に叫びながら、自ら教養ありと自僭して思ひあがつてる人々のまへに切々と語り訴へてゐる人の活ける言葉として、まさに傾聽すべき言葉であると思ひます。

附　記

一、固苦しくなるのを避けて、シュライエルマッヘルの本文をそのまゝには引用しませんでしたが、できますなら彼の本文について、彼の活ける言葉について聽いていたゞきたく思ひます。さいはひ、彼の「宗教について」は、『シュライエルマッヘルの宗教論』として、石原謙博士によつて譯出され、內田老鶴圃から出版されてをります。また、春秋社の「大思想全集」の第二十卷めの中にも河面仙四郎教授の譯が『シュライエルマッヘル、宗教學』としてはいつてをります。原文によらうとして下さるならば、Schleiermachen. Reden über die Religion. それの第三講、（一三四頁以下）および第二講（三八頁以下）。

二、「ゲーテも言つたやうに」といふ所は、よく知られてゐるやうに、オスカー・ワイルドが其の『深き底より』（平田禿木氏譯では『新生』となつてゐます）の中で、母が書き記しておいた言葉として、彼を深き內省に導いた有名な箇所であり、また、其の源をたづれば、ゲーテの『ヰルヘルム・マイスター』（林久男氏譯あり）の中に出る竪琴ひきの一老人が內なる魂をひそかに歌つてゐる、その歌から出てゐるのであります。

三、「いはゞロゴスの顯はれとして」といふ所には、プラトン哲學風の、または有名なる『ヨハネ傳』（新約聖書第四稿高書）風の背景を聯想していたゞきたいのです。（五月二十二日）